



Data

監督・脚本: グレタ・ガーウィグ
 製作: スコット・ルーディ/イーライ・ブッシュ/エブリン・オニール
 出演: シアーシャ・ローナン/ローリー・メトカーフ/トレイシー・レッツ/ルーカス・ヘッジズ/ティモシー・シャラメ/ビーニー・フェルドスタイン/スティーヴン・マッキンリー・ヘンダーソン/ロイス・スミス

👁️👁️ みどころ

誰にでも青春があり、17歳がある。そして、17歳の時は誰でも、狭い世界から広い世界への飛躍を願うもの。それが私の場合は、故郷松山を離れ大阪での一人暮らしだったが、カリフォルニア州のサクラメントに住むレディ・バードことクリスティンの場合は・・・？

どの大学を受験？地元校？それとも遠くの有名校？それが17歳では大きな分岐点だが、さてレディ・バードは？ボーイフレンドともお盛んで、キスから初体験と忙しそうだが、受験勉強は大丈夫？優しい父親に対し、母親は厳しそうだから、その対応は・・・？

母娘間の確執は私には理解困難だが、本作を観ていると何となく……。しかして、レディ・バード17歳の旅立ち、一人立ちは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■なぜレディ・バードと自称？■□■

かつて「ブルーバード」を販売していた日産が、新車を販売するについて、車名を募集したことがある。その時私たちが応募しようとした名前が「レディ・バード」だった。しかして、本作のタイトルになっている「レディ・バード」とは一体ナニ？

それは、『つぐない』(07年)、『シネマ19』(306頁)、『ブルックリン』(14年)、『シネマ38』(211頁)で素晴らしい演技を見せた若手女優、シアーシャ・ローナンが演じる、ハイスクール最終学年の女の子、クリスティンの自称だ。しかし、クリスティンはなぜ自分を「レディ・バード」と名付け、周りにもそう呼ばせているの・・・？

クリスティンが住んでいるのは、カリフォルニア州のサクラメント。冒頭の、大学見学

に出掛けた車の中での、都会に進学したいクリスティンと、地元に残らせたい母親マリオン（ローリー・メトカーフ）との論争を見ていると、クリスティンのイライラの原因がよくわかる。そのため、彼女はクリスティンという親から与えられた名前を離れ、「レディ・バード」として自立したいわけだが、母親との対立に癡癡を起こして、走っている車の中から外に飛び降りるのは如何なもの……。これによってクリスティンは右腕を骨折、そのピンクのギブスには「くたばれママ」と書いたが……。

■□■米国では受験勉強中も異性関係はしっかり！■□■

私の中学・高校時代は男ばかりの受験校だったから、異性関係はほぼゼロ。昨年開かれた高卒50周年記念同窓会に出席した面々を見ていると、そのことの功罪は微妙だが、本作を観ていると、アメリカでは受験勉強中であっても、異性関係は意外にしっかり続いていることがよくわかる。レディ・バードの最初のボーイフレンドはダニー（ルーカス・ヘッジズ）、2番目のボーイフレンドはカイル（ティモシー・キャラメ）だが、ダンスパーティでのファーストキスや、意外にすっきりした相手の切り替え等は、いかにもアメリカ的。また、クリスティンの進路についてあれほど厳格な母親も、ボーイフレンドやセックスについてはおおらかで、「初体験はご自由に！」「ただし避妊は忘れずに！」というものだ。もっとも、初体験をした2番目のボーイフレンド、カイルが童貞ではなかったと知ってレディ・バードが深く傷つく姿は興味深い。

もっとも、69歳の今頃になってこんな話をしてもまったく無意味だが、青春映画では古今東西を問わずこの手のテーマが不可欠なので、一応……。

■□■この母娘関係はイマイチ理解困難！■□■

本作を監督したのは、1983年生まれの俳優出身の若手女性監督、グレッタ・ガーウィグ。監督デビュー作たる本作で、いきなり第90回アカデミー賞で作品賞、監督賞を含む主要5部門にノミネートされ、ゴールデングローブ賞の作品賞と主演女優賞を受賞したのはお見事！本作の第1のテーマは都会の大学への進学にあこがれるハイスクール生の自立だが、第2のテーマはそのテーマを巡る母娘の葛藤と愛情。男の私にはそもそも母娘関係はよくわからないが、冒頭の車の中での言い争いのシーンを見ていると、その確執ぶりはすさまじい。それにひきかえ、レディ・バードの父親のラリー（トレイシー・レッツ）はあくまで優しく娘を見守っているから、父娘関係は良好だが、さて、どちらが正しいのやら？

他方、この母娘関係は最悪かという、意外にそうでもなく、初体験のボーイフレンドが童貞でなかったことに傷ついたレディ・バードが母親を見ていきなり泣きつくシーンや、高校卒業が近づく中で、プロム用のドレスを一緒に選ぶ姿を見ていると、レディ・バードも意外に母親を信頼していることがよくわかる。しかし、肝心の大学への進路について母親に内緒で東部の大学に願書を出すのは如何なもの……。その多くは不合格だったが、

1通だけ補欠合格の通知があったことにレディ・バードは大喜び。しかし、ある日それが母親にバレると、母娘関係はまさに最悪状態に……。

■ 17歳あれこれ！青春映画あれこれ！ ■

本作の主人公レディ・バードことクリスティンが正確に何歳かは知らないが、青春を代表する年齢は世界中どこでも断然17歳。それをテーマにした名曲には、南沙織の「17才」、西郷輝彦の「十七才のこの胸に」等がある。また、17歳をテーマにした映画には『SHOHEY シネマルーム』に掲載している分だけでも、『17歳の処方箋』(02年)、『シネマ6』89頁)、『17歳の風景／少年は何を見たのか』(05年)、『シネマ8』300頁)、『17歳の肖像』(08年)、『シネマ24』20頁)、『17歳』(13年)、『シネマ32』103頁)がある。さらに、本作のパンフレットでは、エッセイを書いている映画評論家に『レディ・バード』と2本立てで観るなら？と質問しているが、その答えは『スウィート17 モンスター』(16年／ケリー・フレモン・クレイグ監督)と『秋のソナタ』(78年／イングマール・ペイルマン監督)だ。

若松孝二監督の『17歳の風景／少年は何を見たのか』は、2000年に起きた岡山のバット殺人事件をヒントにした難解な映画だったが、17歳をテーマにした映画では、その手の映画は例外。その多くは、17歳でのあれこれの貴重な体験を描き、それをバネとしてこれからの生き方を固めていく前向きのもので、本作も当然その範疇だ。

■ 17歳の旅立ちは何？レディ・バードの一人立ちは？ ■

本作を観て私が思い出したのは、1967年4月から大阪大学への入学が決まり、やっと故郷の松山を離れて大阪での一人暮らしができる喜び勇んでいた、私の17歳の頃だ。レディ・バードはなぜカリフォルニア州にあるサクラメントを離れて、東部の大都市ニューヨークに行きたいの？それは故郷のサクラメントが嫌いなため？たしかにレディ・バードがいかにも田舎風なサクラメントに嫌気がさしていることはわかるが、彼女は決してサクラメントという自分の故郷が嫌いなわけではない。ただ、狭いところから、より広いところへ飛躍したいだけだ。そして、その広さ、狭さは面積だけではなく、人間関係や交通機関、遊び場等々に及ぶ。なぜそれに憧れるかという、17歳の若者は男女問わず、そこに自分の成長の可能性を見いだすからだ。

私の場合は、阪急箕面線牧落駅を降りて、はじめて自分の下宿へ歩いた道。4月から7月までの下宿での生活。そして、はじめて大学に行き、同級生たちと話したこと。さらに、はじめて校内の芝生に座り女の子と話した時の興奮や、そこでの学生運動の話題に驚かされたこと等々。私はそれらを昨日のこことのようにはっきりと覚えている。まさに、これこそが17歳の特権なのだ。そして、レディ・バードもその特権をフルに活用するべく、サクラメントを離れてニューヨークに旅立ちたいわけだ。本作ラストに見る、レディ・バード17歳の旅立ちと一人立ちへの歩みに拍手！ 2018(平成30)年6月13日記